



アーバンリサーチドアーズが紹介するのは、長く大事に使いたい日本のいいものと、それをつくる人たち。第8回目は、江戸時代から青森県・津軽地方に伝わる「こぎん刺し」。作家・竹下絵里子さんに、日常生活のなかでも使えるこぎん刺しの刺しかたを教えてください。

こぎん刺し



— 竹下絵里子 —

こぎん刺しの
ここが魅力！
素朴な手法ながら、柄は無限にあり、新しい挑戦の連続です。手を動かし想像を超えた美しさを発見したときの喜びが、また次の作品へと気持ちを駆り立てます。

How to make a KOGIN-SASHI

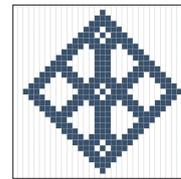
こぎん刺しに挑戦しよう

今回挑戦する模様は「モドコ」とよばれる伝統模様のなかから選んだ「猫の足」。
ひし形の部分が肉球を表していて、とてもかわいい模様です。



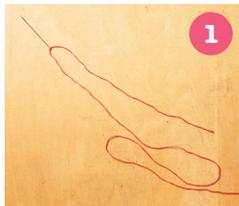
材料
平織の麻布
こぎん糸
(綿刺しゅう糸でも可)

道具
こぎん針
糸ぎりばさみ



[マス目の数=すくう縦糸の本数]

【つくりかた】



針に糸を通し、片側を長くしておきます。このとき玉留めはしません。



布地のタテヨコを確認し、折り目をつけて印をつけます。図案の中心とこの印を合わせて、中心から刺しはじめます。



2の●印のところで、布の裏面から表に針を出します。



図案を見ながら、段の中心から左側を刺します。



糸の反対がわの端に針をつかえ、布地の上下を変えて、段の左端まで刺します。糸の両端のあまりの長さが同じくらいになるように調整しましょう。



布地の裏を見て、段の中央から糸を少し引き出し、両手で段の両端をもって布を動かしながら糸をならします(この作業を糸こきといいます)。



布の上下を返して2段目を右端から左へ刺していきます。段の変わり目の糸は5mmほどの輪っかが残るように糸をゆるませておきましょう。



2段目を刺し終えたら、糸こきをします。



最後の段まで刺し終えたら、布地の裏の表に見えないところを細かくすくって糸始末。玉どめはしません。



針を糸の反対端につかえて、6~9をくりかえしたら、完成!

—— こぎん刺しとは ——

江戸時代に青森県津軽地方の農家で生まれた刺し子。木綿は貴重とされたことから、農家では麻の着物を着ることと藩に定められていました。自家で織った粗い麻布の目を糸で隙間なく埋めるように刺し、少しでもあたたかく、丈夫に着ようとした知恵がはじまり。「モドコ」とよばれるひし形の伝統柄を組み合わせた幾何学模様が特徴で、女性たちの冬の間の手仕事として、家族のために大切に刺し継がれました。



ふくべ

夕顔の実(ひょうたん)。末広がりの形でたくさん実がなることから繁栄を示す。



石畳

生地が四角く見えるのが面白い。連続で刺すとリズムミカルな美しさがある。



てこな

蝶々。美しく不思議に舞う姿は、古くから縁起ものとされた。



猫のmana

津軽の方言で眼(まなこ)のこと。猫が生活に身近な動物だったことがわかる。



四つこごり

雪のかたまり。雪の結晶のようにも見え、長い津軽の冬を思わせる。

竹下絵里子 こぎん刺し作家。2012年に「こぎん刺し絵糸」を立ち上げ、カラフル＆ライトをモットーにした作品制作を始める。手しごとのあたたかみと日常生活でそれを使う喜びを楽しめる作品を追及。オンラインストアなどでのオリジナル作品販売のほか、ワークショップ開催などでこぎん刺しの魅力を伝えている。

写真: 福田真知子 ヘアメイク: 河西幸司

URBAN RESEARCH DOORS

新しい価値観へのトビラを開く “きっかけ”に出会えるお店

使うたび、つくり手の思いが感じられるていねいな仕事。時代を超えて愛され、長く使えるデザイン。アーバンリサーチドアーズは、そんな価値あるものたちに込められた思いを大切に伝えるお店です。「着る・食べる・住む」という日々の暮らしを、豊かにこちよく。今ある自分たちの生活を見つめながら“あなたらしい”スタイルを探しにきてください。

URBAN RESEARCH DOORS のオリジナル家具「Bothy (ボシー)」



スコットランド地方の言葉で山小屋の意味を持つ「Bothy (ボシー)」シリーズは、URBAN RESEARCH DOORS が提案するオリジナル家具。木の温もりや表情を感じる、オークの無垢材を使用し、ほんの少しアウトドアのエッセンスを加えた家具で、森を感じるような、心地よい住空間を演出します。urdoors-furniture.com